

## 原 著

「その人に最善のケア」の創造に関する質的研究：  
育児の一実践を用いてそのプロセスを視覚化する

正村啓子

山口大学大学院医学系研究科基礎看護学分野(基礎看護学) 宇部市南小串1丁目1-1 (〒755-8505)

Key words : 最善のケア, 創造, 人間理解, 共感, PENPモデル

## 和文抄録

本研究の目的は、「その人に最善のケア」はどのようにして創造されるのか、そのプロセスを、著者が先行研究において考案した「卓越した看護実践への道モデル (The model of Pathways to Excellent Nursing Practice : PENPモデル)」を用いて明らかにし図示することである。看護師自身の子供への直接の育児の経験を、解釈的現象学によりPENPモデルを用いて分析した。

その結果、次のことを明らかにすることができた。母親は児の視点に立って、児の表現、心の世界に生じている問題・矛盾、経験世界を関連付けて理解し、児に共感した。その後、母親は、児の心の世界に生じている問題・矛盾を解決することを目標に設定し、児の心の世界に問題・矛盾を生じさせた経験世界の要因を基に解決策を立てた。そして、目標達成を目指して解決策にそって実施した。

本研究の成果をさらに洗練し、これらの研究成果を基に、「その人に最善のケア」を創造し提供できるようになるための教育システムの開発に寄与する必要がある。

## はじめに

看護師養成の大学化は、質の高い看護実践能力を備えた看護師を育成することを目標として、1992年

「看護師等の人材確保の促進に関する法律」の制定により、急速に進んだ<sup>1)</sup>。その後20年を経て、看護系大学数は、1992年の十数校から2012年には203校にまで増加し、2011年2月の看護師国家試験合格者における大学卒業者の割合は24.8%に達している<sup>2)</sup>。看護系大学の卒業生が質の高い看護実践能力を身に付け、看護の対象者一人一人に最善のケアを提供できる看護師として成長するためには、看護基礎教育終了後も継続学習に努めなければならない。2010年には看護職員の臨床研修等が努力義務化され<sup>3)</sup>、すべての看護職は自らの責任において自己の能力の開発・維持・向上に努める責務を負うことになった<sup>4)</sup>。

専門職として看護の目指す「質の高いケア」、あるいは、「最善のケア」とはどのようなケアであろうか、また、どのようにして創造され提供されるのであろうか。これらのことを具体的に示すことは、看護師が質の高い看護の実践能力を身に付け、看護の対象者一人一人に最善のケアを提供できる看護師として成長する上で役に立つと考える。

著者は、看護師として素晴らしい実践家になること、すなわち、その人に最高のケアを提供できるようになることを目指して、研究的に取り組んできた。まず、著者自身が直接経験した臨床看護師としての看護の実践や教員としての看護学生の臨床実習指導、著者自身の子供への育児の実践を記述し振り返り分析した。これらの研究成果は「個別な対象の問題解決の過程に潜む論理、看護師が問題を解決した5事例の分析」として報告した<sup>5, 6)</sup>。

次に、看護学生の臨床実習中の看護の経験を振り

振り返り分析する研究に取り組んだ。その第一段階では、卓越した看護実践において重要な要素を明らかにするために、著者が考案したその人を理解することを中心に視覚化した「人間相互理解モデル (Human Being Mutual Understanding Model : HBMUM)」<sup>7)</sup>を用いて解釈的現象学により分析した。その結果、「倫理」、すなわち、日常の人間相互の関係において患者を尊重すること」は、卓越した看護実践の重要な基盤であった。また、「看護ケアを始める時の関心の深さ」、「患者理解の深さ」、「看護ケアの質」は強く関連していることを確認した<sup>7)</sup>。第二段階では、卓越した看護実践への道を明らかにし図示するために、その人を理解することを中心に視覚化したHBMUMに、さらに、理解した後の実践のプロセスを加えて、卓越した看護実践への道モデル (Pathways to Excellent Nursing Practice (PENP) model) を考案し (図1)<sup>8)</sup>、一看護学生の看護の経験を解釈的現象学によりPENPモデルを用いて分析し、卓越した看護実践への一つの道についてPENPモデルを用いて示した。また、この看護学生が実践の基盤としていた見方を「最適な看護ケアを

創造するための基盤」としてPENPモデルを用いて示した<sup>8)</sup>。第三段階では、第一段階の研究<sup>7)</sup>において明らかにした、卓越した看護実践の重要な基盤である「倫理」、すなわち、日常の人間相互の関係において患者を尊重すること」について、どのようにしてその人を大切にすることのかをPENPモデルを用いて分析し、「卓越した看護実践の基盤としての“倫理”：患者を大切に看護するとはどういうことか」として図示した<sup>9)</sup>。

本研究では、これまでの研究成果を基盤に、先述した看護学生の臨床実習中の看護の経験に関する第二段階の研究成果である「最適な看護ケアを創造するための基盤」<sup>8)</sup>について、より詳細な知見を得ることを目的とした。研究対象となり得る記述があり、その人に最善のケアを提供できる看護師として成長する上で実際に大きな影響を与えた、著者自身の育児の実践<sup>5,6)</sup>を分析した。

メイヤロフは著書「ケアの本質」の中で、「一人の人格をケアするとは、最も深い意味で、その人が成長すること、自己実現することを助けることである」と述べ、人々をケアするさまざまな関係におい

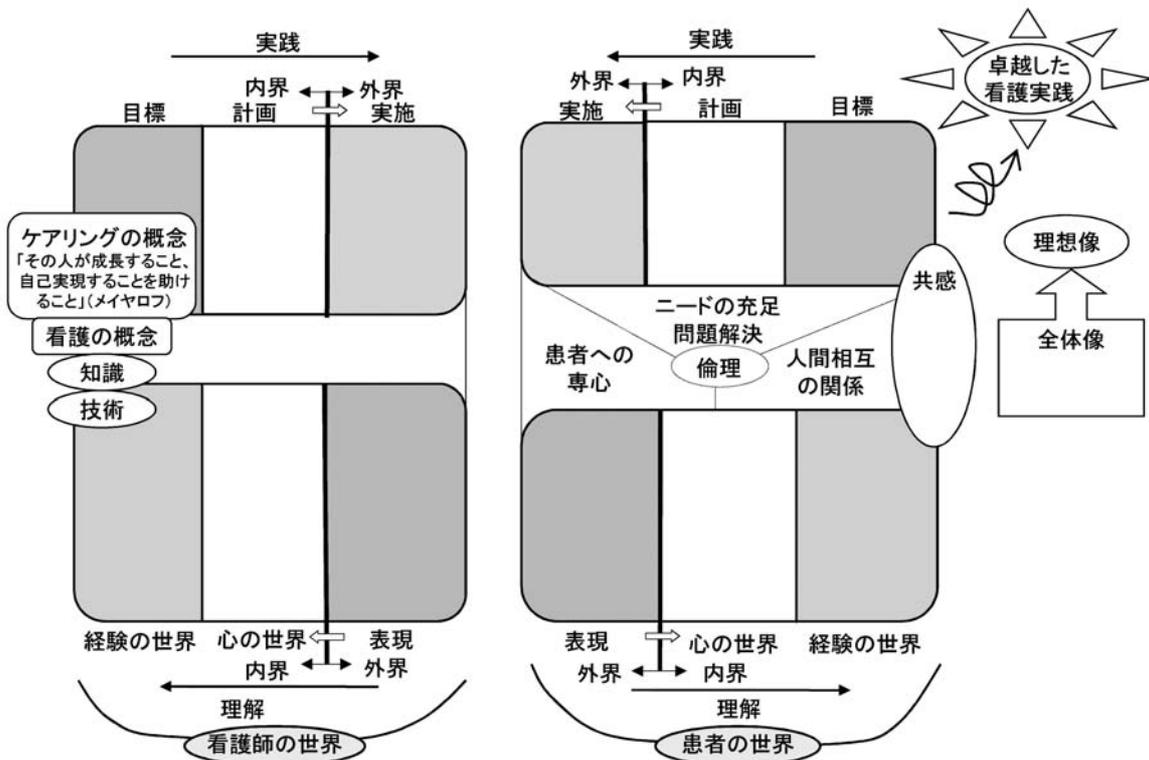


図1 卓越した看護実践への道 (PENP) モデル<sup>8)</sup>

でも、また、新構想、ある理想、ある共同社会をケアすることにおいても、これらの間にどのような重要な相違があろうとも、その相手が成長するのを助けるという共通したパターンがある<sup>10)</sup>と述べた。本研究では、看護師である母親が子供をケアすることを通して、看護師が対象者をケアすることとの共通した部分（レベル）で、「その人に最善のケア」を創造するプロセスについて、PENPモデルを用いて分析し具体的に示すことに取り組んだ。

## 研究目的

本研究の目的は、「その人に最善のケア」創造のプロセスを、一育児の実践について、解釈的現象学によりPENPモデルを用いて明らかにし、具体的に示すことである。

## 研究方法

### 1. 研究デザイン

解釈的現象学によりPENPモデルを用いて分析した。

### 2. 解釈的現象学

現象学とは、ある一つの経験を、その経験をしている人が理解している通りに理解するときに有用である<sup>11)</sup>。解釈的現象学とは、人々がどのようにして自分たちの生活を解釈し、経験を意味づけするのかを探究することである<sup>12)</sup>。本研究では、看護師自身の子供への直接の育児の経験に関する記述をもとに、どのようにしてその児に最善のケアは創造されたのかを明らかにすることから、解釈的現象学を用いた。

### 3. 「卓越した看護実践への道」モデル (PENPモデル)

その人にケアを提供するためには、まず、その人を理解する必要がある。その人を理解するためには、その人の外界である「表現」、そして、その人の内界である「心の世界」と「経験世界」がある<sup>7)</sup>。HBMUM<sup>7)</sup>はこの理解の世界を視覚化したものである。その人を理解することに続いて、「目標」を定め、「計画」を立て、「実施」する実践の世界がある。HBMUMにこれらの実践の世界、及び著者による先行研究の成果を加えて、「卓越した看護実践への道」(PENP)モデルを考案した(図1)<sup>8)</sup>。

## 4. 研究対象

著者が、「その人に最善の看護ケア」を提供できる看護師として成長する上で、実際に重要な影響を与えた、著者自身の母親としての育児の経験1事例、激しく欲求表現をした児に安定を取り戻した育児の実践を先行研究<sup>5, 6)</sup>の中から抽出し研究対象とした。

## 5. データの分析

解釈的現象学により、PENPモデルを用いて分析した。

- 1) 実践者は、自分で実践の状況を具体的にありのままに記述した。
- 2) 研究者は、1)をPENPモデルに記入し、その人に最善のケアはどのようにして創造されたのかについて分析した。
- 3) 研究者は、2)の分析結果を、PENPモデルを用いて図示した。

## 6. 研究の枠組み

著者は、先行研究<sup>8)</sup>において、卓越した看護ケアを提供できるための重要な要素として、「その人に最適の看護ケアを創造し提供できること」と「その人の理想像に向かって継続して看護ケアを提供できること」を明らかにした。本研究では、「最適な看護ケアを創造するための基盤」をさらに発展させ、「その人に最善のケア」を創造するプロセスについて、より詳細な知見を得ることを目指した。

## 研究結果

「その人に最善のケア」を創造するプロセスを明らかにするために、看護師自身の子供への直接の育児の経験1事例について、解釈的現象学によりPENPモデルを用いて、児を理解し共感に至るプロセス、及び、共感後の実践のプロセスを視覚化して分析した。その結果は次の通りであった。

### 〈事例：欲求を激しく表現する3歳児〉

3歳7ヵ月の女兒。1歳で保育園に行き始めた時、風疹、水痘、百日咳、麻疹（肺炎を併発）と次々に罹患した。母親は児を消耗させないように、欲求はできるだけ受け入れ必死の看病であった。健康には気を配り、おやつは手作り、お弁当にはスープも付けた。9歳の兄と父母の4人家族で、母親もフルタイムで働いていた。

## 1. 実践の状況

〈8月〉児は欲求が通らないと、髪を引っ張り、ひっくりかえって泣いた。夜、寢床に就くと、「水、水に氷入れて、牛乳…」と次々に要求した。母親は、『1歳で保育園に行き始め次から次に感染症に罹患した時、消耗させないように欲求はできるだけ受け入れたから我慢できなくなっている、理解させて我慢させよう』と思って、よく話して理解させて我慢させた。このように話して理解させて我慢させることを繰り返すうちに、児は、徐々に欲求を主張しなくなった。母親は、『児はわかっている、少し落ち着いた』と考えた。

〈9月〉保育園からの連絡帳に、園では保母としか遊ばない、欲求が通らないと攻撃的と書いてあった。母親は、児は『家では落ち着いたと思ったのに園では攻撃的、どうしてだろう?』と児を理解できなかった。

〈10月 運動会〉朝から児が母親に甘えるので、運動会に参加させるために厳しい態度をとった。運動会では、児は先生に引っぱられて定置につくし、お遊戯の輪から外へ走りだした。母親は、その様子をじっと我慢して一日見ていた。昼食の時、児が他児の母親に抱かれているのが母親の目に入った。母親は児のそばに行ったが児は振り向きもしなかった。母親は困惑した。そして、その時、『児は、甘えたいのだ。母親の愛を求めている! 厳しく接したから愛情を他に求めている、これは受け入れないと危険だぞ!』と、これまでの「児の欲求を我慢させる」という解決法に危険性を感じた。

その夜、母親は考えた。児が他児の母親に抱かれている時、母親は児のそばに行ったが、なぜ児は自分の母親に来なかったのだろうか。他児の母親と自分(児の母親)を比較すると、他児の母親は欲求をよく受け入れる母親であった。一方、母親は、これまで、児が病気をした時、どんなに忙しくても児の欲求をできる限り受け入れ、最善を尽くして育児をしてきたことから、この気持ちが強く、自分の視点で児を見ていたのだ。しかし、児の行動から児の母親に甘えたい気持ちを感じ取ったことによって、母親は、児を自分の視点で捉えていたことに気が付いた。そして、これまでの育児過程を「児の視点」に立って振り返った。1歳で保育園に行き始めた時次々に感染症に罹患したが、その時の児の苦痛や苦

勞、また、園には父親が送迎していること、母親は帰宅が遅く帰っても家事に追われていたこと、母親は寢床で絵本を読んでも次にしなくてはならないことが心の中にあつたこと、などが次々に思い出された。そして、児の母親の愛に満たされない気持ちがありありと伝わってきた。母親は、忙しさのあまり児の言動に目が行き、児の心を見つめていなかった。自分のこれまでの児へのかかわり方、すなわち、理解させて我慢させる、は全く児の気持ちに逆らったものであった、と深く反省した。そして、「児の行動を多面的に見つめ児の気持ちを知り、児の気持ちを満たす」ことを目標に掲げた。解決策(計画)として、母親も可能な日は園へ児を送迎して児の様子を観察する、帰ったらまず抱いて児の心を満足させてから家事をする、家事は短時間で済ませ児と接する時間を作ることを立てた。このように、この児の解決策が見えると、母親の気持ちは落ち着き前向きになった。

その翌朝、児を起こすとぐずついたので、膝から離れるまでしっかり抱いて話をした。児は朝食の時には鼻歌をうたっていた。朝食は、前の夜に準備していた。母親は、「この解決法でいける」と感じ、その後も継続してこのことを実施した。園への送迎を母親も週1~2回、可能な範囲で行った。また、機会あるごとに児の気持ちを満たすかかわりを繰り返した。スカートが短かった。長いスカートを欲しがったので買って与えた。お姉さんらしくなり嬉しそうであった。児の好きなピンク色の自転車を購入した。夕方毎日楽しみに乗った。児の希望で初めて理髪店で散髪をした。一人で摘んでもらい理容師さんに褒められた。七五三の着物を早めに購入した。夕方、着物を着たがるので着せると嬉しそうに毎夕着た。お正月休みは、母親は仕事のことを忘れて、児の気持ちを満たすようにゆっくり接した。1月2日、児の誕生日には、いとこ達が来てケーキでお祝いをした。自分が中心になることができ得意になっていた。

1月、冬休みが明けた頃には、それまで夜中に尿を漏らしていたが、起きて自分から知らせるようになった。また、保育園の連絡帳には、児は落ち着きを取り戻し我慢も徐々にできるようになったと書いてあった。

## 2. 分析の結果

前述した育児の実践の状況をPENPモデルに記入し、「その人に最善のケア」はどのようにして創造されたのかについて分析した。その結果は、次の通りであった。

児が「強い欲求表現」(表現)をしたのは、児は「母親に甘えなかった」(心の世界)からであり、それは、園への送迎は父親がしていたこと、また、母親は児に接する時間も少なく、接していても児の気持ちになれる余裕がなかったことなどの経験世界の実事から、児は「母親の愛によって気持ちが満たされていない」(心の世界)からであった。しかし、母親は、最初は、児の欲求表現を母親自身の視点から見て、児が保育園に行き始め1歳で次々に感染症に罹患した時、児を消耗させないように欲求をできるだけ受け入れたから、「我慢できなくなっている」と捉えて、欲求を我慢させるように対応したため状況は改善せず、児は欲求を外に向かって表現し始めたのである。この時、母親は児の状況を理解できずにいた。しかし、運動会で児を1日観察したことで、母親は、児が他児の母親に抱かれている様子(表現)を見て、児の「母親に甘えたい」気持ち(心の世界)を感じ取ったのである。このように、母親は児の気持ちを感じ取ったことで、母親の視点は母親自身から児の視点へと移った。そして、これまでの母親の児へのかかわり、具体的には、園への送迎は父親が行っていること、また、母親は児に接する時間も少なく、接していても児の気持ちになる余裕がないことなど(経験世界)を児の視点から考えると、児の心の世界に生じている問題・矛盾、すなわち、児の「母親の愛に満たされない気持ち」がありありと感じられたのであった。そして、母親は、忙しさのあまり児の行動に目が向き、児の心を見つめていなかったことに気づき、これまでの「理解させて我慢させる」かかわり方は、この児の気持ちに全く逆らったものであったことを実感し、深く反省したのであった。

以上のように、母親は、児の視点に立って、児の問題となる表現、その表現の基になっている心の世界に生じている問題・矛盾、そのような心の世界の問題・矛盾を産生した経験世界の実事をつなげて理解した時、母親は児に共感し、同時に児の問題も明確になり、母親自身の改善点も明らかになったので

あった。このようにして、母親の心は問題の解決へと動いた。

解決に当たっては、まず、母親は、児の心の世界に生じている問題・矛盾を解決するために、これまでの母親のかかわり方の反省点も考え併せて、「児の行動を多面的に見つめ児の気持ちを知ること、そして、児の気持ちを満たすこと」を目標に掲げた。

解決策(計画)としては、児にそのような問題・矛盾を生じさせた経験世界の要因を基に、

- ・可能な日は母親も園へ児を送迎し、児の様子を観察する
- ・帰ったらまず抱いて児の心を満足させて家事を始める
- ・家事等は工夫して短時間にし、児と接する時間を作る
- ・機会あるごとに児の気持ちを満たす

をあげた。

以上のようにして設定した目標、解決策を、母親は、翌朝早速実行した。朝食は前の夜準備しておいた。母親が児を起こすとぐずついたので、母親は児をまず抱いて、児が膝から離れるまで話をした。いつも機嫌が悪いのに朝食の時には鼻歌を歌っていた。このことから、母親は解決策の効果を確認し、その後も児の反応を観察しながら、この解決策を継続して実施した。

また、機会を見つけては、児の気持ちを理解し満たすかかわりをした。

- ・スカートが短かった。児が長いスカートを欲しがったので児の気持ちを考えて購入した。(⇒お姉さんらしくなり嬉しそうであった。)
- ・児の好きなピンク色の自転車を購入した。(⇒夕方毎日楽しみに乗った。)
- ・児の希望で、理髪店で初めて散髪してもらった。一人で摘んでもらい理容師さんに褒められた。
- ・七五三の着物を早めに購入した。七五三まではまだ日があるが、児が着たいと言ったので着せた。(⇒嬉しそうに毎夕着た)
- ・お正月休みには、母親は仕事のことを忘れて児の気持ちを満たすように、ゆっくり接した。
- ・1月2日の誕生日には、いとこ達が来てお祝いをしてもらった。(⇒自分が中心になることができ得意になっていた。)

このように、母親は機会あるごとに、児の表現か

ら児の気持ちを考え、児の気持ちを満たすようにかかわった。そして、その結果は、(⇒)に示したように、児の表現を通して、児が満足したかどうかを確認した。

このようなかかわりによって、3ヵ月後には、夜間尿を漏らしていたが起きて自分から知らせるようになり、また、少しずつ我慢もするようになり、児は心身ともに安定を取り戻し始めた。これらのことから、児の心の世界に生じていた問題・矛盾、母親の愛に満たされていなかった児の気持ちは徐々に満たされ、児は自分をコントロールできるようになってきたと考えられた。

## 考 察

「その人に最善のケア」を創造するプロセスについて、看護師自身の子供への直接の育児の経験1事例を、解釈的現象学により、PENPモデルを用いて分析した結果、次のことを明らかにすることができた。

### 1. 母親は自分自身の視点から児の視点へ移る

母親は、児の強い欲求表現を、1歳の頃保育園に行き始め次々に感染症に罹患した時、消耗させないように欲求はできるだけ受け入れたから我慢できなくなっている、と自分自身の視点で捉えて、理解させて我慢させるようにかかわったところ、改善しなかった。母親は、児をよく観察したことによって、児の表現(言動)から、児の心の世界(甘えたい気持ち)を感じ取った。このことによって、母親の視点は自分の位置から児の位置へと移り、児の世界へと入っていった。

このように、自分の視点で児を見ていた母親は、児の表現をよく観察して児の気持ちを感じ取ったことによって、自分自身の視点から児の視点へと移った。

### 2. 共感するほどにその人を理解する

児の視点へと移った母親は、その後、児の心の世界からさらに児の経験世界へと入っていった。そして、これまでの母親自身の児へのかかわり(園への送迎は父親がしている、母親は児に接する時間も少ない、接していても児の気持ちになる余裕がない…など)が次々に思いだされ、このような母親のかかわりを児の視点から感じ取ったことによって、母親

は、児の心の世界に生じている問題・矛盾(母親の愛に満たされない感情)を理解できたのであった。このように、児の視点にたつて、児の表現(強い欲求表現)と、そのような表現の基になっている児の心の世界の問題・矛盾(母親の愛に満たされない感情)を、このような児の心の世界の問題・矛盾を産生した児の経験世界の実事(園への送迎は父親がしている、母親は児に接する時間も少ない、接していても児の気持ちになる余裕がない…など)とつなげて理解できた時に、母親は、母親の愛に満たされない児の気持ちがありありと伝わってきて、母親は児に共感したのであった。母親が児に共感した時には、また、児の問題も明確になっており、母親自身の改善点(児の心の世界を見ていなかった、母親自身の視点から児を見ていたこと)も明らかになっていた。

このようにして、母親は、児に共感し、同時に児に生じている問題も明確になり、また、母親自身の改善点も明らかになった。

### 3. その人を理解したことを基に目標、計画を設定する

児に共感し、児の問題が明確になり、母親の改善点も明らかになった後は、母親は児を理解することから、問題の解決(実践)へと向かった。児の強い欲求表現の基になっている、児の心の世界に生じている問題・矛盾(児の母親の愛に満たされない気持ち・甘えたい気持ち)を解決するために、母親のこれまでのかかわり方の改善点(忙しさのあまり児の心を見つめていなかった)を考え併せて、「児の行動を多面的に観察し児の気持ちを知ること、そして、児の気持ちを満たすこと」を目標に掲げた。具体策(計画)としては、児の心の世界に問題・矛盾を生じさせた経験世界の実事(園への送迎は父親がしている、母親は児に接する時間も少ない、接していても児の気持ちになる余裕がない)を基に、「可能な日は母親も児の送迎をして児の様子を観察する。帰ったらまず抱いて児の心を満足させて家事を始める。家事等は工夫して短時間で済ませ児と接する時間を作る。」を立てた。また、児の経験世界を広く観察して、「機会あるごとに児の気持ちを満たす」ことを計画した。

このように、共感した後は、母親は、児の心の世界に生じている問題・矛盾を解決するために、母親自身の改善点も考え併せて目標掲げ、解決策は、

児の心の世界に問題・矛盾を生じさせた経験世界の要因を基に計画を立てた。

#### 4. 目標に向かって解決策を実施する

母親は、立てた目標、解決策を、翌朝早速実施した。前の夜朝食は準備して、児と接する時間を作った。母親が児を起こすとぐずついたので、児をまず抱いて膝から離れるまで話をし、それから家事をした。児はいつも機嫌が悪いのに朝食の時には鼻歌を歌ってご機嫌であった。このように、母親は計画に沿って実施した結果、児の機嫌がよくなったことから、この解決策の効果を確認し、その後もこの解決策を継続して実施した。一方、児の園への送迎を母親も可能な範囲で週1~2回実施し、園での児の様子を観察した。また、児の経験世界を広く観察して、機会あるごとに児の気持ちを満たすかかわりをした。児が長いスカートが欲しがった時、購入する自転車を決める時、散髪をする時、七五三の着物を夕方着

たいと言った時、児の気持ちを考えて児の気持ちを満たすようにかかわった。児は満足そうであった。

このように、解決策にそって実施しながら、常に児の反応（表現）を観察して、児の気持ちを満たすかかわりであったかどうか、すなわち、目標に照らして評価した。

#### 5. 児の表現を広く観察して評価する

児の気持ちを満たすかかわりを機会あるごとに実施し、3ヵ月を経過した頃には、児は落ち着きを取り戻し、少しずつ我慢するようになった。また、夜間尿を漏らしていたが起きて自分から知らせるようになったのである。このように児の言動（表現）にもよい変化がみられるようになってきていることから、児の気持ちは満たされてきたことが予測できよう。すなわち、心の世界に生じていた問題・矛盾（気持ちが満たされない）は改善されてきたと考えられた。

母親は、児の心の世界に生じている問題・矛盾を

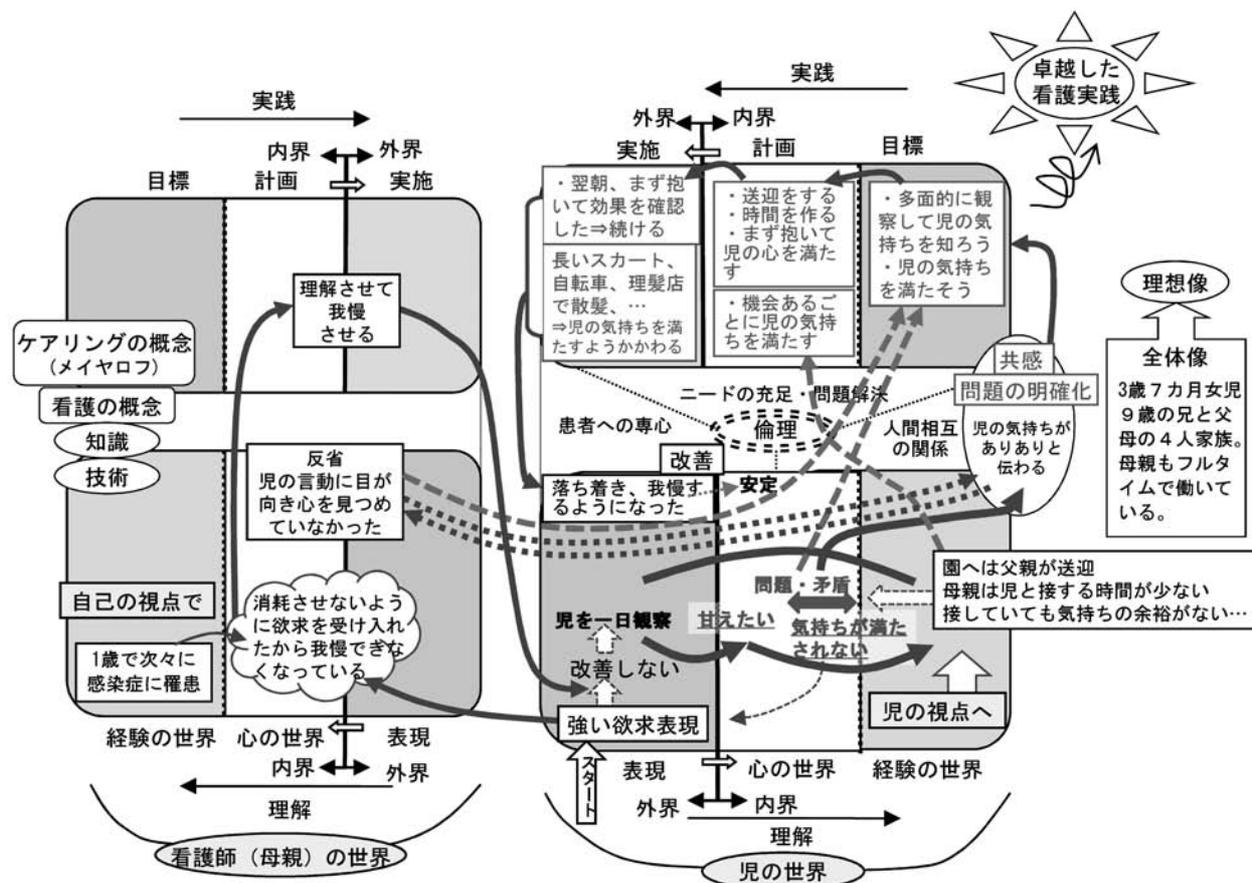


図2 「その人に最善のケア」創造のプロセス

解決するために、効果的なかかわりを継続して実施しながら、児の反応（表現）を広く観察し、児の心の世界に生じている問題・矛盾の改善状況を予測しながらかかわった。

以上のように、本研究ではPENPモデルを用いて、「その人に最善のケア」はどのようにして創造され提供されるのかについて、看護師であり母親である著者が、看護師の見方でかかわった直接の育児の経験をPENPモデルを用いて分析したことによって、その人を理解し共感するプロセス、理解及び共感したことをもとに目標を設定し、解決策（計画）を立て、実施、評価するプロセスについて、より詳細を明らかにすることができ、PENPモデルを用いて、具体的に示すことができた（図2）。

本研究の成果は、その人に最善のケアを創造し提供するために活用しながら、さらに事例を積み重ね洗練する必要がある。そして、これらの研究成果を基に、「その人に最善のケア」を創造し提供できるようになるための教育システムを開発する必要がある。

このことは、看護師が看護基礎教育終了後も継続学習により、「その人に最善のケア」を提供できることを目指して学ぶ上で役に立つと考える。そして、協働する様々な職種もまた「その人に最善のケア」を提供することを学び実践することによって、「患者中心」、「患者の尊重」という理想は、より高い次元で具現化され、人々に大きな恩恵をもたらすであろう。さらに、このことは、教育の実践や日常生活における育児や家庭内、職場内の人間相互の関係等においても役に立つであろう。

## 結 論

看護師であり母親である著者が、看護師の見方でかかわった自身の子供の育児の経験1事例を用いて、「その人に最善のケア」を創造するプロセスについて、解釈的現象学によりPENPモデルを用いて分析し、その結果を図示した（図2）。

1. 児が激しい欲求表現をした時、母親は自分の視点から児を見てかかわり、状況は改善しなかったが、児の表現（言動）をよく観察し、児の心の世界を感じ取ったことで、母親の視点は児の視点へと移り児の世界へと入っていった。

2. 児の視点に立って、児の表現、児の心の世界に生じている問題・矛盾、児の経験世界を繋げて理解したことによって、母親は児に共感し、同時に、児に生じている問題も明確になり、また、母親の改善点も明らかになった。
3. 共感した後は、母親は児を理解するプロセスで得たことを基に、児の問題解決へと向かった。児の心の世界に生じている問題・矛盾を解決することを、自身の改善点も含めて目標に設定し、解決策は、児の心の世界に問題・矛盾を生じさせた経験世界の要因を基に立案した。
4. 実施においては、目標に向かって解決策を実施しながら、常に児の表現（反応）を観察して、目標に照らして評価しながらかかわった。
5. 目標達成に向かう効果的なかかわりを継続して実施しながら、児の表現を広く観察して、児の心の様子を予想し、児の心の世界に生じている問題・矛盾の改善状況を評価しながらかかわった。

## 引用文献

- 1) 大室律子. 看護教育の大学化の推進とその意義. 看護学教育Ⅲ看護実践能力の育成, 日本看護系大学協議会 広報・出版委員会編, 日本看護協会出版会. 東京. 2008; 85.
- 2) 石橋みゆき, 辻邦 章, 西尾和幸. 平成23年保健師助産師看護師学校養成所指定規則改正に伴う看護系大学における新カリキュラムの概要－教育課程の変更承認申請の内容から. 看護 2012; 53 (5) : 398-403.
- 3) 保健師助産師看護師法. 第28条の2. <http://law.e-gov.go.jp/htmldata/s23/s23Ho203.html> (参照2013-11-6)
- 4) 日本看護協会. 継続教育の基本. ver.2 2012; 4. <http://www.nurse.or.jp/nursing/education/keizoku/>. (参照2013-11-6)
- 5) 正村啓子. 個別な対象の問題解決の過程に潜む論理, 看護者が問題を解決し得た5事例の分析 (1). 看護望 1999; 24 (11) : 99-104.
- 6) 正村啓子. 個別な対象の問題解決の過程に潜む論理, 看護者が問題を解決し得た5事例の分析 (2). 看護望 1999; 24 (12) : 89-95.
- 7) Masamura K. Essential elements for

- excellence in nursing practice, Reflection and analyses of Japanese nursing students' experiences during provision of care using the Human Being Mutual Understanding Model. *Med Biol* 2010 ; 154 (4) : 152-184.
- 8) Masamura K. A pathway to excellent nursing practice, analyses of a Japanese nursing student's experience of care using the model of "Pathways to Excellent Nursing Practice" (PENP). *Med Biol* 2013 ; 157 (4) : 417-432.
- 9) 正村啓子. 卓越した看護実践の基盤としての“倫理” : 患者を大切に看護するとはどういうことか. *医と生物* 2013 ; 157 (6) : 1207-1219.
- 10) ミルトン・メイヤロフ, ケアの本質. ゆみる出版. 東京, 2003 ; 13-16.
- 11) Cohen MZ, Kahn DL, Steeves RH. Hermeneutic phenomenological research, A practical guide for nurse researchers. Sage Publications, Thousand Oaks, CA, 2000 ; 3.  
(Marlene Zichi Cohen, David L. Kahn, Richard H. Steeves著, 大久保功子訳: 解釈的現象学による看護研究, インタビュー事例を用いた実践ガイド. 日本看護協会出版会. 東京, 2005 ; 3.)
- 12) Marlene Zichi Cohen, David L. Kahn, Richard H. Steeves, 解釈的現象学による看護研究, インタビュー事例を用いた実践ガイド. 日本看護協会出版会. 東京, 2005 ; 7.

## Qualitative Study on the Creation of the Best Care for the Person : Visualizing the Process through a Single Child's Care

Keiko MASAMURA

Department of Fundamental Nursing (Fundamental Nursing), Yamaguchi University Graduate School of Medicine, 1-1-1 Minami Kogushi, Ube, Yamaguchi 755-8505, Japan

### SUMMARY

This study aimed to clarify and delineate how “the best care for the person” was created using the Pathways to Excellent Nursing Practice (PENP) model that was developed by the author in a previous study. The experience of a nurse in the actual daily child care for her child was analyzed by interpretive phenomenology using the PENP model.

The following results were obtained : The mother understood the child from the child's viewpoint, and developed empathy with the child by linking the child's expression, the problem/contradiction in the child's mind world, and the child's experience world. Then, the mother set a goal for solving the problem/contradiction in the child's mind world, and took measures based on the factors in the child's experience world that produced the problem/contradiction in the child's mind world. Finally, the mother put the measures into practice with the aim of achieving the goal.

The findings of this study can be refined, and should contribute to the development of an education system for creating and offering “the best care for the person”.